

理想自己への志向性の促進要因の検討：理想自己の実現のもつ 意味・実現に伴う感情・自己効力感の交互作用に着目して

田中 優 貴 (愛知教育大学 教育学研究科 発達教育科学専攻)

石田 靖 彦 (愛知教育大学 学校教育講座)

An Examination of the Promotional Factors on the Intention to become the Ideal Self: Focusing on the Interaction among Perceived Value, Emotion, and Self-Efficacy of Realization of the Ideal Self

Yuki TANAKA (Sciences of Human Development and Education, Graduate School of Education, Aichi University of Education)

Yasuhiko ISHIDA (Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education)

要約 本研究の目的は、理想自己の実現のもつ意味、実現に伴う感情、自己効力感が、理想自己への志向性へ及ぼす影響を明らかにすることである。大学生358名に対し、質問紙調査を行った。その結果、実現に伴う感情尺度の因子として、「実現に伴う肯定的感情」「実現失敗に伴う否定的感情」という二因子が抽出された。また、自己効力感尺度の因子として、「実現に向けた期待」「感情統制」「頑健性」という三因子が抽出された。理想自己への志向性を従属変数、実現のもつ意味と実現に伴う感情を独立変数とした分析で交互作用が有意傾向であった。下位検定の結果、実現のもつ意味低群において、実現に伴う感情高群は、低群と比べ、理想自己への志向性が高く、実現のもつ意味高群において、実現に伴う感情高群は、低群と比べ、理想自己への志向性が高い傾向があった。さらに、実現に伴う感情高群低群ともに、実現のもつ意味高群は、低群と比べ、理想自己への志向性が高かった。また、実現のもつ意味と実現に伴う肯定的感情を独立変数とした分析で交互作用が有意傾向であった。下位検定の結果、実現のもつ意味低群において、実現に伴う肯定的感情高群は、低群と比べ、理想自己への志向性が高い傾向にあり、実現のもつ意味高群において、実現に伴う肯定的感情高群は、低群と比べ、理想自己への志向性が高かった。また、実現に伴う肯定的感情高群低群ともに、実現のもつ意味高群は、低群と比べ、理想自己への志向性が高かった。さらに、実現失敗に伴う否定的感情と頑健性を独立変数とした分散分析で交互作用が見られた。下位検定の結果、実現失敗に伴う否定的感情高群において、頑健性高群は、低群と比べ、理想自己への志向性が高かった。このことから、否定的感情が高い場合に、頑健性が理想自己への志向性の促進要因として機能する可能性が示唆された。

Keywords : 理想自己, 志向性, 交互作用

問 題

本研究では、Atkinson(1957)の動機づけに関する理論に基づき、理想自己の実現のもつ意味、理想自己の実現に伴う感情、理想自己の実現に関する自己効力感が、理想自己への志向性へ及ぼす影響を交互作用の検討によって明らかにすることを目的とする。

水間(2003)は、理想自己への志向性を、自分が理想と考える方へ、自己を近づけていくことを目的として、自己に対し、直接される働きかけと定義している。これまで、理想自己への志向性と自己評価との関連が研究されてきた。たとえば、水間(2002)は、理想自己への志向性が高く、現実自己と理想自己とのズレに対する意識化の程度が高いほど、自己評価は否定的であることを示している。また、水間(2003)は、自己をよりよいものにしたいという気持ちと自己嫌悪感とは、併存しているということを指摘している。しかし、水間(2003)では、自己の変容志向の高さと、自己嫌悪感の高さとの間に関連はないという結果も示されている。つまり、自己評価との関連については、研究結果は一貫していないといえる。その一方で、理想自己への志向性は、自己形成における動機づけの高さと関連があることが示されている。たとえば、水間

(1998)では、理想自己の水準が高いと、可能性追求意識が高いことが示されている。また、水間(2002)では、将来自分が変化するだろうと考える程度を表す予測評定得点と、理想自己への志向性は、正の相関を示している。このことから、理想自己への志向性が、自己形成を促すような働きをする可能性が推測される。

Atkinson(1957)の動機づけに関する理論では、「動機づけ＝特性達成動機×成功の魅力×成功の主観的確率」という式によって、動機づけを規定する要素が表現されている。一方、水間(2004)では、「理想自己への志向性＝実現可能性×実現のもつ意味×実現に伴う感情」という式によって、理想自己への志向性を規定する要素が表されている。本研究では、これらの要素を、Atkinson(1957)の動機づけを表す式中の要素と対応すると考える。具体的には、実現可能性は、成功

¹ 動機づけに関する理論は、これ以外にも提唱されているが、赤井(2005)は、Atkinsonの理論の特徴として、行動を手段ではなく目的としてとらえており、内発的動機づけによる行動を説明できることを挙げている。速水(1998)は、自己形成は、自己決定により進められることから、内発的動機づけと深く関連すると示している。よって、本研究では、Atkinson(1957)のモデルを基に考えることにする。

の主観的確率に、実現のもつ意味と実現に伴う感情は、成功の魅力に、理想自己への志向性は動機づけにそれぞれ対応すると考える。水間(2004)の実現のもつ意味という要因は、Atkinson(1957)の動機づけを表す式では扱われていない。Atkinson(1957)は、自身の理論において、目標の価値を、実現が成功したときに感じられる肯定的感情ととらえているが、速水(1998)は、目標の価値は、Atkinson(1957)のいう成功の魅力より、広い概念であり、目標自体の重要度等、目標に随伴するものとして考えるべきであると指摘している。また、水間(2004)における、実現のもつ意味とは、実現の重要性を示すものである。このことから、目標の価値には、実現に伴う感情だけでなく、実現の重要性も含まれると考えられる。したがって、本研究では、水間(2004)の実現のもつ意味を、Atkinson(1957)の成功の魅力に含まれると仮定し、理想自己への志向性に影響する要因として考える。

実現に伴う感情の下位尺度として、実現に伴う肯定的感情と、実現失敗に伴う否定的感情を想定する。Russell & Carroll(1999)は、感情の因子分析の結果、肯定的感情と否定的感情が異なる因子に分かれ、これらが独立していることを示している。また、小川・門地・菊谷・鈴木(2000)も、快や不快など全体的な感情を測定する一般感情尺度を作成し、肯定的感情を表す因子と否定的感情を表す因子とは、独立していることを示している。したがって、本研究においても、感情を肯定的感情と否定的感情に分けて扱うことにする。

Atkinson(1957)のいう特性達成動機は、成功達成の動機と失敗回避の動機を合わせたものとされている。Simoyama(1974)は、特性達成動機を測定する尺度を作成し、因子として、「達成傾向の持続および成功への願望」「失敗の予測・失敗への恐怖」「困難・障害を克服しようとする傾向」「達成活動の関心・選好」を抽出している。この中の「達成に対する困難・障害を克服しようとする傾向」は、本研究で扱う自己効力感と重なる部分があり、特性達成動機は、自己効力感等の変数と明確に区別しづらいという問題が生じる。したがって、本研究では特性達成動機は扱わないことにする。

本研究では、理想自己の実現成功の主観的確率を、理想自己の実現に関する自己効力感(以下、自己効力感)として扱う。速水(1998)では、成功の主観的確率とは、成功すると考える確率であり、行動の結果についての期待に当たることを示している。Bandura(1977)は、期待を、結果予期と行動予期に分け、結果予期を、行動がどのような結果をもたらすかという予期、行動予期を、人が行動をどの程度うまくできると考えるかという予期と定義している。行動の結果についての期待は、行動予期と考えられる。行動予期は、自己効力に相当し、動機づけに強く影響すると考えられている。したがって、主観的確率として自己効力感を

扱うことにする。

本研究では、自己効力感の因子として、「実現に向けた期待」「感情統制」「粘り強さ」の三因子を仮定する。理想自己を実現する過程では、解決が困難だと思えるような問題にも適切に対処できることが必要である。そのような特性を表す概念として、小塩・中谷・金子(2002)は、精神的回復力を挙げている。そして、この概念の因子として、「肯定的な未来志向」「新奇性追求」「感情調整」という三因子を抽出している。「肯定的な未来志向」とは、苦境においても、未来に対し、肯定的なイメージをもつことを表す因子であり、「新奇性追求」とは、さまざまなことへ興味をもち、行動すること表す因子である。そして、「感情調整」とは、Thompson(1994)の定義では、個人の目標に達するため、感情反応をモニタリングし、評価し、変化させる内在的・外在的過程とされ、否定的な感情の抑制や、肯定的な感情の維持ならびに促進に関与することが示されている。自己効力感は、Bandura(1977)のいう行動予期と考えられることから、理想自己を実現できるだろうという期待は、自己効力感に欠かせない要因であると思われるため、一つ目の因子として「実現に向けた期待」を仮定する。また、感情統制がうまくできることにより、目標の実現に向けて、より効果的な行動が可能になると考えられる。レジリエンスに対する行動調整と感情調整の影響について、Eisenberg, Guthrie, Fabes, Reiser, Murphy, Holgren, Maszk & Losoya(1997)は、行動調整からの影響は見られなかったが、感情調整からは有意な正のパスが見られたことを示している。感情統制により、ストレスフルな状況においても、問題を適切に対処することが可能になると考えられるため、二つ目の因子として「感情統制」を仮定する。さらに、Sherer & Maddux(1982)は、自己効力感の因子の構成要素として、開始／持続性、逆境における効力感を示している。困難な目標の達成において、動機づけを持続させることや逆境に耐えることは必要な要素であると考えられるため、三つ目の因子として「粘り強さ」を仮定する。

水間(2004)において、実現可能性、実現のもつ意味、実現に伴う感情が、理想自己への志向性を促進するという結果が見られている。また、田中(2009)でも、実現のもつ意味、実現失敗に伴う否定的感情が、理想自己への志向性に及ぼす影響を検討した。その結果、これらの要因が、理想自己への志向性に促進的な影響を及ぼすという結果が示された。このように、先行研究では、これらの変数間の直線的な関係は示されているが、交互作用については筆者の知る限り、確認されていない。したがって、本研究では、「理想自己への志向性=実現のもつ意味×実現に伴う感情×自己効力感」という式によって、理想自己への志向性を規定する要素が表されると考えた上で、実現のもつ意味、実現に

伴う感情、自己効力感間の交互作用を検討することを目的とする。本研究を行うことで、理想自己への志向性の構造の詳細が明らかになり、自己形成過程において、動機づけを高める際の一助となると考えられる。

田中・石田(2013)において、実現のもつ意味・実現に伴う感情・自己効力感が自己実現的態度に及ぼす影響を調べた。その結果、実現のもつ意味と自己効力感の一因子である感情統制との間、そして、実現に伴う肯定的感情と自己効力感との間で交互作用が見られた。この結果を踏まえ、本研究では、一つ目の仮説として、実現は意味があると考え、なおかつ、感情統制が高い人は、そうでない人と比べ、理想自己への志向性が高いことが予想される。また、二つ目の仮説として、自己効力感が高く、なおかつ、実現に伴う肯定的感情を強く予想している人は、そうでない人と比べ、理想自己への志向性が高いことが考えられる。また、田中・石田(2013)では、実現失敗に伴う否定的感情低群は、高群に比べ、自己実現的態度が高かった。この結果から、否定的感情の高さが、目標を達成しようとする気持ちを妨げる作用をもつ可能性が推測できる。よって、三つ目の仮説として、自己効力感が高く、なおかつ、実現失敗に伴う否定的感情が低い人は、そうでない人と比べ、理想自己への志向性が高いことが考えられる。

方法

調査時期 2012年10月19日(金)から11月12日(月)の期間中、実施した。

調査対象者 愛知県の国立、私立大学の学生に協力を依頼し、371名から回答を得た。そのうち、回答に不備のある者を除き、358名(男性125名、女性233名)を分析対象とした。平均年齢は19.86歳($SD=.98$)であった。

調査実施の手続き 「個人の目標に関する調査」として教示を行い、無記名で回答してもらった。授業中に一斉に配付し、その場で実施、回収した。

質問紙の構成

フェイスシート：性別、年齢、学年を尋ねた。

- (1) 理想自己の表出：自由記述で回答を求めた。
- (2) 実現のもつ意味：田中・石田(2013)で作成した6項目を用いた。
- (3) 実現に伴う感情：田中・石田(2013)で作成した14項目を用いた。
- (4) 自己効力感：田中・石田(2013)で作成した18項目を用いた。
- (5) 理想自己への志向性：水間(2002)が作成した理想自己への志向性を測定する12項目を用いた。これは、「〇〇の実現に対してふだんから深く関わろう(取り組もう)としている」などの項目からなる。「当てはまらない(1)」から「当てはまる(5)」の5件法で回答を求めた。

結果と考察

[実現のもつ意味尺度の因子分析]

実現のもつ意味尺度の6項目に対し、因子分析を行った。一因子を指定し、バリマックス回転を行った。全体的に、実現に意味があることを示す項目において正の因子負荷量が示されたため、この因子を「実現のもつ意味」因子と命名した。6項目での α 係数は.759であった。この尺度の合計得点を実現のもつ意味合計得点とした。実現のもつ意味合計得点の平均値は23.01($SD=3.97$, $SE=.03$)であった。

[実現に伴う感情尺度の因子分析]

実現に伴う感情尺度の14項目に対し、因子分析を行った。二因子を指定し、プロマックス回転を行った。二因子とも、田中・石田(2013)で示された因子構造と同様の構造であったため、それぞれ「実現に伴う肯定的感情」因子、「実現失敗に伴う否定的感情」因子と命名した。第一因子の α 係数は.823、第二因子の α 係数は.810であった。第一因子の合計得点を、実現に伴う肯定的感情得点、第二因子の合計得点を、実現失敗に伴う否定的感情得点とした。実現に伴う肯定的感情得点の平均値は29.51($SD=4.32$, $SE=.23$)、実現失敗に伴う否定的感情得点の平均値は22.47($SD=5.61$, $SE=.30$)であった。

[自己効力感尺度の因子分析]

自己効力感尺度の18項目に対し、因子分析を行った。三因子を指定し、プロマックス回転を行った。複数の因子に同程度の因子負荷量を示した項目(「〇〇という目標を実現するにあたり、うまくいかないことがあっても、簡単にはあきらめないと思う」)を削除し、再度因子分析を行った。結果をAppendix 1に示した。第一因子と第二因子は、田中・石田(2013)と同様の項目で構成されていたため、それぞれ「実現に向けた期待」因子、「感情統制」因子と命名した。第三因子は、実現の過程で障害になることに会っても動揺しない程度を表す因子であると解釈できるため、「頑健性」因子と命名した。各因子の α 係数は、それぞれ、.886、.757、.733であった。17項目での α 係数は.877であった。第一因子の合計得点を、実現に向けた期待得点、第二因子の合計得点を、感情統制得点、第三因子の合計得点を、頑健性得点、そして、17項目の合計得点を、理想自己の実現に関する自己効力感合計得点とした。実現に向けた期待得点の平均値は27.45($SD=5.85$, $SE=.31$)、感情統制得点の平均値は13.23($SD=2.85$, $SE=.15$)、頑健性得点の平均値は14.14($SD=3.72$, $SE=.20$)、自己効力感合計得点の平均値は54.79($SD=9.82$, $SE=.52$)であった。

[理想自己への志向性尺度の因子分析]

理想自己への志向性尺度の12項目に対し、因子分析を行った。一因子を指定し、バリマックス回転を行った。共通性が低かった1項目(「できるなら〇〇

以外の別の理想を見つけていきたいと思う」)を削除し、再度因子分析を行った。すると、共通性が低い項目(「自分がたとえ〇〇と違っていても、理想は理想だからそれでいい」)が再び見られたため、それを削除した上で、因子分析を行った。結果をAppendix 2に示した。全体的に、理想自己を志向する意識の高さを示す項目において正の因子負荷量が示されたため、この因子を「理想自己への志向性」因子と命名した。 α 係数は、10項目では.881であったが、2項目(「もしも〇〇が実現できなくても、それはそれで仕方がない」「〇〇を実現したいと思いつつも、本当はどこかあきらめているところがある」)を除外すると、.895に上がったため、8項目の合計得点を、理想自己への志向性合計得点とした。理想自己への志向性合計得点の平均値は、28.07($SD=6.501$, $SE=.35$)であった。

[各変数の合計得点間の相関係数]

各変数の合計得点間の相関係数をTable 1に示した。実現のもつ意味と実現に伴う肯定的感情との間($r=.533$, $p<.01$)、実現のもつ意味と実現失敗に伴う否定的感情との間($r=.463$, $p<.01$)、実現のもつ意味と自己効力感との間($r=.343$, $p<.01$)、実現のもつ意味と実現に向けた期待との間($r=.463$, $p<.01$)、実現のもつ意味と感情統制との間($r=.225$, $p<.01$)、理想自己への志向性との間($r=.590$, $p<.01$)に、有意な正の相関が見られた。実現に伴う肯定的感情と実現失敗に伴う否定的感情との間($r=.373$, $p<.01$)、実現に伴う肯定的感情と自己効力感との間($r=.196$, $p<.01$)、実現に伴う肯定的感情と実現に向けた期待との間($r=.314$, $p<.01$)、実現に伴う肯定的感情と理想自己への志向性との間($r=.384$, $p<.01$)に有意な正の相関が見られた。実現失敗に伴う否定的感情と実現に向けた期待との間($r=.276$, $p<.01$)、実現失敗に伴う否定的感情と理想自己への志向性との間($r=.435$, $p<.01$)でも、有意な正の相関が見られた。そして、自己効力感と理想

自己への志向性との間($r=.528$, $p<.01$)、自己効力感と実現に向けた期待との間($r=.625$, $p<.01$)、自己効力感と感情統制との間($r=.410$, $p<.01$)に有意な正の相関が見られた。さらに、実現に向けた期待と感情統制との間($r=.577$, $p<.01$)、実現に向けた期待と粘り強さとの間($r=.322$, $p<.01$)、感情統制と粘り強さとの間($r=.354$, $p<.01$)にも有意な正の相関が見られた。

[実現のもつ意味と実現に伴う感情が理想自己への志向性に及ぼす影響]

実現のもつ意味高低群と実現に伴う感情高低群を独立変数、理想自己への志向性を従属変数とした二要因分散分析を行った。結果をFigure 1に示した。実

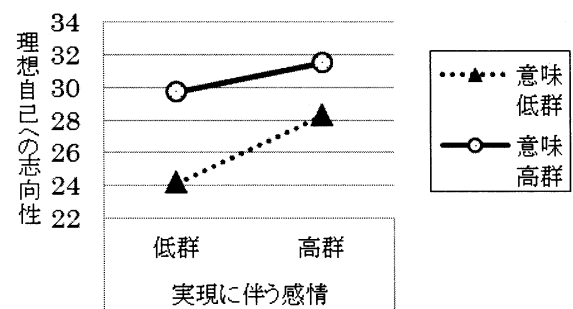


Figure 1 理想自己への志向性に対する 実現のもつ意味と実現に伴う感情の関連

現のもつ意味の主効果が有意($F(1,345)=39.905$, $p<.01$)であり、高群は低群と比べ、理想自己への志向性が高かった。また、実現に伴う感情の主効果が有意($F(1,345)=17.920$, $p<.01$)であり、高群は低群と比べ、理想自己への志向性が高かった。さらに、交互作用が有意傾向($F(1,345)=2.825$, $p<.10$)であったため、単純主効果検定を行った。その結果、実現のもつ意味低群において、実現に伴う感情高群は、低群と比べ、理想自己への志向性が高く、実現のもつ意味高群において、実現に伴う感情高群は、低群と比べ、理想自己への志向性が高い傾向があった。さらに、実現に

Table 1 各尺度間の相関係数

	実現に伴う肯定的感情	実現失敗に伴う否定的感情	自己効力感	実現に向けた期待	感情統制	頑健性	理想自己への志向性
実現のもつ意味	.533**	.463**	.343**	.463**	.225**	-.005	.590**
実現に伴う肯定的感情	—	.373**	.196**	.314**	.161	-.102	.384**
実現失敗に伴う否定的感情		—	.079	.276**	.006	-.238	.435**
自己効力感			—	.882**	.764**	.672**	.528**
実現に向けた期待				—	.577**	.322**	.655**
感情統制					—	.354**	.410**
頑健性						—	.044

(** $p<.01$)

伴う感情高群低群ともに、実現のもつ意味高群は、低群と比べ、理想自己への志向性が高かった。このことから、実現のもつ意味と実現に伴う感情は、どちらかが低くても、動機づけを一定水準に保つことができると推測できる。目標の重要性も予想される感情も、目標の実現のための行動を開始・持続させることに影響するため、このような結果が見られたと推測できる。
[実現のもつ意味と実現に伴う肯定的感情が理想自己への志向性に及ぼす影響]

実現のもつ意味高低群と実現に伴う肯定的感情高低群を独立変数、理想自己への志向性を従属変数とした二要因分散分析を行った。結果を Figure 2 に示した。

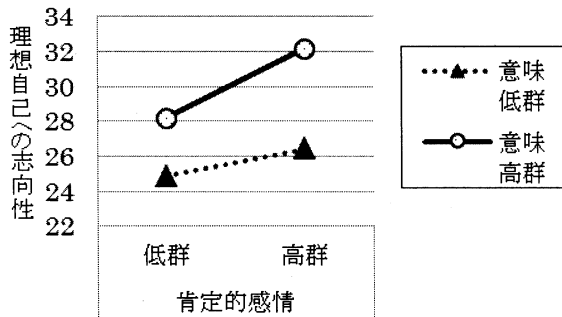


Figure 2 理想自己への志向性に対する実現のもつ意味と実現に伴う肯定的感情の関連

実現のもつ意味の主効果が有意 ($F(1, 347) = 45.182, p < .01$) であり、高群は低群と比べ理想自己への志向性が高かった。また、実現に伴う肯定的感情の主効果が有意 ($F(1, 347) = 16.633, p < .01$) であり、高群は低群と比べ、理想自己への志向性が高かった。さらに、交互作用が有意傾向 ($F(1, 347) = 3.229, p < .10$) であったため、単純主効果検定を行った。その結果、実現のもつ意味低群において、実現に伴う肯定的感情高群は、低群と比べ、理想自己への志向性が高い傾向にあり、実現のもつ意味高群において、実現に伴う肯定的感情高群は、低群と比べ、理想自己への志向性が高かった。また、実現に伴う肯定的感情高群低群で、実現のもつ意味高群は、低群と比べ、理想自己への志向性が高かった。このことから、実現のもつ意味と実現に伴う肯定的感情のどちらかが低くても、動機づけを一定水準に保つことができると推測できる。感情の中でも、肯定的感情は、正の誘因価であり、行動を開始・持続させる効果があるため、動機づけにも影響したと考えられる。

[実現のもつ意味と実現失敗に伴う否定的感情が理想自己への志向性に及ぼす影響]

実現のもつ意味高低群と実現失敗に伴う否定的感情高低群を独立変数、理想自己への志向性を従属変数とした二要因分散分析を行った。結果を Figure 3 に示した。実現のもつ意味の主効果が有意 ($F(1, 346) = 53.441, p < .01$) がであり、高群は低群と比べ、理

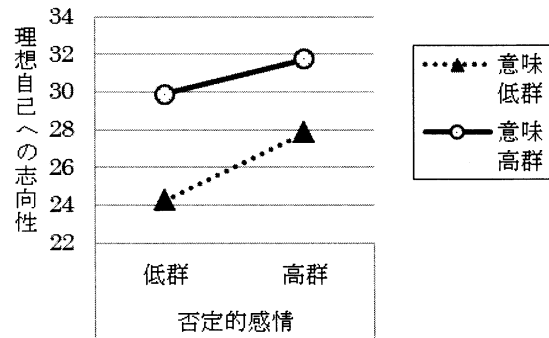


Figure 3 理想自己への志向性に対する実現のもつ意味と実現失敗に伴う否定的感情の関連

想自己への志向性が高かった。また、実現失敗に伴う否定的感情の主効果が有意 ($F(1, 346) = 17.361, p < .01$) であり、高群は低群と比べ、理想自己への志向性が高かった。否定的感情の主効果が見られたことから、否定的感情の高さが目標に向かう気持ちを高める可能性が推測できる。否定的感情と実現のもつ意味との間、そして、理想自己への志向性との間に正の相関が見られたことから、実現失敗に伴う否定的感情を強く予想しているほど、目標が重要であり、それを実現したいと考えているといえる。理想とする自己像が、自尊感情を支える主な自己像として機能していると仮定すると、実現に失敗し、否定的感情を感じる事が自尊感情の低下につながるため、理想自己を実現しようとする気持ちは強くなると考えられる。

[実現のもつ意味と自己効力感が理想自己への志向性に及ぼす影響]

実現のもつ意味の高低群と自己効力感の高低群を独立変数、理想自己への志向性を従属変数とした二要因分散分析を行った。結果を Figure 4 に示した。実

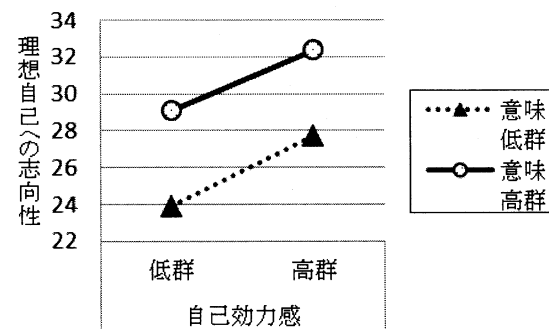


Figure 4 理想自己への志向性に対する実現のもつ意味と自己効力感の関連

現のもつ意味の主効果が有意 ($F(1, 345) = 64.486, p < .01$) がであり、高群は低群と比べ、理想自己への志向性が高かった。また、自己効力感の主効果が有意 ($F(1, 345) = 33.526, p < .01$) であり、高群は低群と比べ、理想自己への志向性が高かった。水間(2004)等で、実現のもつ意味と自己効力感とは、動機づけを構成する要素であると考えられているため、それぞれ、高い方が

動機づけが高いという結果が見られたと考えられる。

[実現のもつ意味と感情統制が理想自己への志向性に及ぼす影響]

実現のもつ意味の高低群と感情統制の高低群を独立変数, 理想自己への志向性を従属変数とした二要因分散分析を行った。結果を Figure 5 に示した。実現の

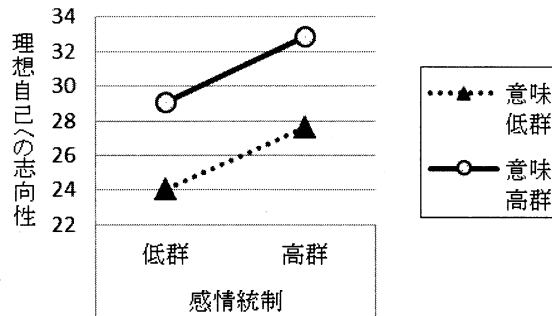


Figure 5 理想自己への志向性に対する 実現のもつ意味と感情統制の関連

もつ意味の主効果が有意 ($F(1,349) = 72.200, p < .01$) であり, 高群は低群と比べ, 理想自己への志向性が高かった。また, 感情統制の主効果が有意 ($F(1,349) = 37.264, p < .01$) であり, 高群は低群と比べ, 理想自己への志向性が高かった。実現のもつ意味が高く, なおかつ, 感情統制が高い人は, 理想自己への志向性が高かったが, そうでない人と比べ, 交互作用が見られなかったことから, 仮説1は支持されなかった。

この結果から, 実現の持つ意味と感情統制は互いに関連せず, それぞれ理想自己への志向性に影響することが考えられる。速水(1998)で, 動機づけに対する認知的な要因の効果が示されており, 実現が重要であるという認知は, 動機づけを促進すると考えられている。理想自己の実現に重要性を感じていれば, 理想自己を実現することへの気持ちは強くなると考えられる。また, Eisenberg et al. (1997)は, 感情統制ができる人は, ストレスフルな出来事にうまく対処し, 課題に対する持続性も高いと推測している。これを踏まえて考えると, 感情統制ができる人は, 目標の実現に対する気持ちも高いと推測できるため, 感情統制の効果も見られたと考えられる。

[実現に伴う肯定的感情と自己効力感が理想自己への志向性に及ぼす影響]

実現に伴う肯定的感情の高低群と自己効力感の高低群を独立変数, 理想自己への志向性を従属変数とした二要因分散分析を行った。結果を Figure 6 に示した。実現に伴う肯定的感情の主効果が有意 ($F(1,346) = 40.614, p < .01$) であり, 高群は低群と比べ, 理想自己への志向性が高かった。また, 自己効力感の主効果が有意 ($F(1,346) = 31.033, p < .01$) であり, 高群は低群と比べ, 理想自己への志向性が高かった。自己効力感が高く, なおかつ, 実現に伴う肯定的感情を強く

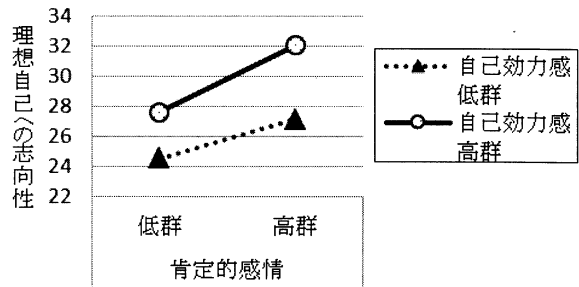


Figure 6 理想自己への志向性に対する 自己効力感と実現に伴う肯定的感情の関連

予想している人は, そうでない人と比べ, 理想自己への志向性が高かったが, 交互作用は見られなかったことから, 仮説2は支持されなかった。

速水(1998)は, 人が行動を起こすとき, 感情は大きな役割を果たすことが指摘している。これまでの研究では, 感情から理想自己への志向性への直接的な影響は見られていないが, 上述したように肯定的感情が正の誘因価となり, 動機づけが高まることが予想される。

[実現失敗に伴う否定的感情と自己効力感が理想自己への志向性に及ぼす影響]

実現失敗に伴う否定的感情の高低群と自己効力感の高低群を独立変数, 理想自己への志向性を従属変数とした二要因分散分析を行った。結果を Figure 7 に示

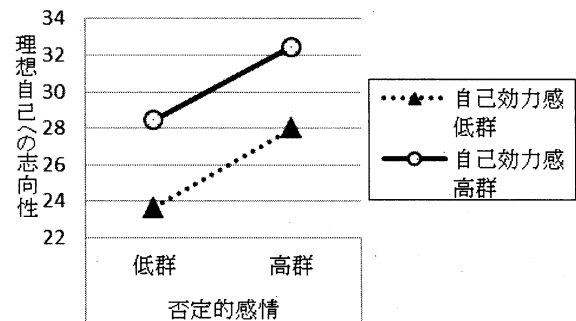


Figure 7 理想自己への志向性に対する 自己効力感と 実現失敗に伴う否定的感情の関連

した。実現失敗に伴う否定的感情の主効果が有意 ($F(1,345) = 47.198, p < .01$) であり, 高群は低群と比べ, 理想自己への志向性が高かった。また, 自己効力感の主効果が有意 ($F(1,345) = 58.367, p < .01$) であり, 高群は低群と比べ, 理想自己への志向性が高かった。実現失敗に伴う否定的感情が高い人の方が, 低い人と比べ, 理想自己への志向性が高かったことから, 仮説3は支持されなかった。上述したように, 実現失敗に伴う否定的感情は, 実現のもつ意味と, 理想自己への志向性との間にも正の相関が見られた。このことから, 実現失敗に伴う否定的感情を強く予想しているほど, 理想自己の実現が重要であり, 理想自己に向かう気持ちが強くなると推測できる。

[実現失敗に伴う否定的感情と自己効力感の下位尺度が理想自己への志向性に及ぼす影響]

実現失敗に伴う否定的感情の高低群と頑健性の高低群を独立変数、理想自己への志向性を従属変数とした二要因分散分析を行った。結果をFigure 8に示した。

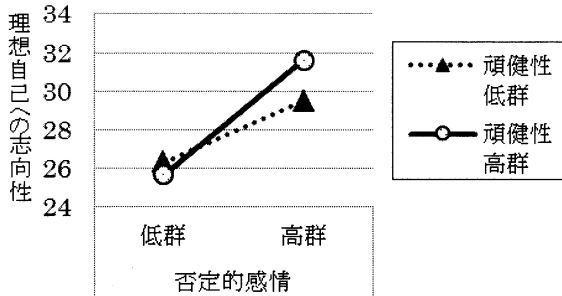


Figure 8 理想自己への志向性に対する
実現失敗に伴う否定的感情と頑健性の関連

実現失敗に伴う否定的感情の主効果が有意($F(1,348) = 46.434, p < .01$)であり、高群は低群と比べ、理想自己への志向性が高かった。また、交互作用が有意($F(1,348) = 4.128, p < .05$)であったため、単純主効果検定を行った。その結果、頑健性高群低群ともに、実現失敗に伴う否定的感情高群は、低群と比べ、理想自己への志向性が高かった。また、実現失敗に伴う否定的感情高群において、頑健性高群は、低群と比べ、理想自己への志向性が高い傾向にあった。頑健性低群において、実現失敗に伴う感情高群の方が、低群より、理想自己への志向性が低かったという結果は、レジリエンスの側面が低いと、ストレスフルな状況下で、適応しにくいことを表していると考えられる。Beauvais & Oetting (1999)は、問題が現れた状況においてのみ、レジリエンスは重要な役割を果たすことを述べている。この結果は、このレジリエンスの記述を支持するものだと考えられる。頑健性の低さが、レジリエンスの低さを表すと考えると、頑健性が低い場合、強い否定的感情の存在が脅威となり、ストレスフルな状態に陥ることになるため、動機づけが低下することが考えられる。

引用文献

- 赤井誠生(2005). 第8章 感情・動機づけ 中島義明・繁樹算男・箱田裕司(編) 新・心理学の基礎知識 有斐閣 pp.267-268.
- Atkinson, J. W. (1957). Motivational determinants of risk-taking behavior. *Psychological Review*, **64**, 359-372.
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.
- Beauvais, F., & Oetting, E. R. (1999). Drug use, resilience, and the myth of the golden child. In Glantz, M. D., & Johnson, J. L. (Eds.), *Resilience and*

- development: Positive life adaptations*. New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers. pp.101-107.
- Eisenberg, N., Guthrie, I. K., Fabes, R. A., Reiser, M., Murphy, B. C., Holgren, R., Maszk, P., Losoya, S. (1997). The relations of regulation and emotionality to resiliency and competent social functioning in elementary school children. *Child Development*, **68**, 295-311.
- 水水敏彦(1998). 第1章 動機づけとは何か 自己形成の心理—自律的動機づけ 金子書房 pp.2-46.
- 水間玲子(1998). 理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について *教育心理学研究*, **46**, 131-141.
- 水間玲子(2002). 理想自己を志向することの意味—その肯定性と否定性について— *青年心理学研究*, **14**, 21-39.
- 水間玲子(2003). 自己嫌悪感と自己形成の関係について—自己嫌悪場面で喚起される自己変容の志向に注目して— *教育心理学研究*, **51**, 43-53.
- 水間玲子(2004). 理想自己への志向性の構造について—理想自己に関する主観的評定との関係から— *心理学研究*, **75**, 16-23.
- 小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人(2000). 一般感情尺度の作成 *心理学研究*, **71**, 241-246.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史(2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成 *カウンセリング研究*, **35**, 57-65.
- Russell, J. A., & Carroll, J. M. (1999). On the bipolarity of positive and negative effect. *Psychological Bulletin*, **125**, 3-30.
- Sherer, M., & Maddux, J. E. (1982). The self-efficacy scale: Construction and validation. *Psychological Reports*, **51**, 663-671.
- Simoyama, T. (1974). A validity study of a scale to measure achievement motivation. *Japanese Psychological Research*, **16**, 197-204.
- Sherer, M. & Maddux, J. E. (1982). The self-efficacy scale: Construction and validation. *Psychological Reports*, **51**, 663-671.
- 田中優貴(2009). 他者からの承認に関する理想自己を重要視する人の特徴—自己形成意識・自律性に影響する要因の特徴 南山大学 卒業論文(未公開)
- 田中優貴・石田靖彦(2013). 理想自己の実現のもつ意味・感情・自己効力感が自己実現の態度に及ぼす影響 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要, **3**, 63-70.
- Thompson, R. A. (1994). Emotional regulation: A theme in search of definition. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **59**, 25-52.

Appendix 1 自己効力感尺度の因子分析結果 (最尤法・プロマックス回転)

	F1	F2	F3
13 将来, ○○という目標が実現しているとは思えない(*)	-.803	.182	.120
16 ○○という目標を実現することは, 自分にはできないと思う(*)	-.795	.236	.217
1 ○○になれると思う	.699	.162	.106
10 ○○になるために行動することができると思う	.680	.067	.064
4 ○○になれる自信がある	.647	.283	.105
6 ○○という目標を実現する能力があると思う	.637	.193	.101
8 ○○という目標の実現の過程でつまずくと, 目標の達成をあきらめてしまうと思う(*)	-.600	.104	.157
9 ○○という目標を達成するための行動がうまくいなくても, 達成できるまで頑張れると思う	.574	.233	.128
5 ○○という目標の実現の過程で, 動揺することがあっても, 気持ちを落ち着かせられると思う	.005	.785	-.034
7 ○○という目標を実現するにあたり, うまくいかないことがあっても, 冷静でいられると思う	-.096	.655	-.138
2 ○○という目標を実現するにあたり, 問題が生じてても, 自分の感情をコントロールできると思う	.069	.605	-.079
18 ○○という目標を達成するために行動しているとき, 困難に出会ってもくじけずにいられると思う	.294	.363	-.008
17 ○○という目標の実現の過程で, 壁にぶつかると, 動揺してしまうと思う(*)	.029	-.249	.686
14 ○○という目標を達成するために行動した結果が思い通りでないと, 気分が沈み憂うつになると思う(*)	.151	-.085	.647
11 困難に出会うと, ○○という目標を達成することができるかどうか, 不安になると思う(*)	.027	-.031	.569
15 ○○という目標の実現の過程でつらい出来事があると, 耐えられないと思う(*)	-.223	-.006	.541
12 ○○という目標の実現に向けて行動しているとき, 困難に出会うのを避けたいと思う(*)	-.193	.071	.394
	因子間相関	F2	.564
		F3	-.238
			-.180

Appendix 2 理想自己への志向性尺度の因子分析結果 (最尤法・バリマックス回転)

	F1	共通性
8 ○○の実現のために全力を尽くそうと思う	.828	.686
2 ○○を実現させるために, できる限り努力しようと思う	.771	.594
9 いつも, ○○を実現していこうという気持ちがある	.766	.587
1 ○○の実現に対してふだんから関わろう (取り組もう) としている	.746	.556
7 ○○の実現がたとえ困難なものだとしても, それに向かっていきたい	.743	.552
5 たとえ周りが反対しても, ○○の実現のために頑張っていこうと思う	.693	.481
4 どうすれば○○を実現できるか, 常に考えている	.626	.392
12 ○○は, 理想にすぎないので, 特にそのために何かをするというようなことはない(*)	-.607	.369
10 ○○を実現したいと思いつつも, 本当はどこかあきらめているところがある(*)	-.408	.166
6 もしも○○が実現できなくても, それはそれで仕方がない(*)	-.397	.158
	因子寄与	4.541
	累積寄与率	45.409